



The Working Brain —An introduction to neuropsychology—

by A. R. Luria

「働く脳」といかに簡潔な、それだけに魅力的な題をもったこの本は、リハビリテーション界でもすでに有名なソビエトの心理学者ルリアの最新の著作である。ルリアは第二次大戦中の脳損傷患者の示す失行、失認、失語の諸症状の研究とその治療から出発し、それ以来今日に到るまで 30 数年を高次機能障害の臨床ひとすじに歩んできた。多数の論文や本を發表しているが、言語（ロシア語）的な壁のため欧米の学界に知られるのは遅れた。しかし、1960年代から欧米でも注目されはじめ、特に 1966 年にその主著（1962年）の英訳（Higher Cortical Functions in Man）が 500 ページの大冊で出てからはその評価は決定的となった。それを含め、英訳で読める彼の著作は別に紹介したので参照されたい*。

さてこの本はペンギン・ブックスのための書き下ろしで、英訳（B. Haigh による）が原本である。ペンギン叢書らしく、心理学に興味をもつ広い読者層を対象として割に平易に書かれており、英訳も滑らかで読み易い。しかし内容はかなり深味がある。

全体は 4 部に分かれ、第 1 部「機能的組織化と精神活

動」は理論的枠組と脳の主要な 3 つの「機能単位」の概説、第 2 部「脳の局所系とその機能的分析」は、後頭葉からはじまり前頭葉に終る脳の各部位の機能の分析で、この部がいわば本書の中心である。第 3 部は「総合的精神活動とその脳における組織化」で、第 2 部でのべた各部位の機能のいわば横のつながりとしての「知覚」、「運動と行為」、「注意」、「記憶」、「言語」、「思考」などの総合機能の記述であり、ルリアとしてもこれまであまり試みたことのない統合化の試みである。多数の新しい視点を含み興味深い。一面第 2 部と重複する点も少なくない。第 4 章は結論で簡潔に全体の要点がまとめられている。本書は世界の失行、失認、失語研究の中でもユニークな（唯物論的でかつダイナミックな）立場に立つ著者とその学派の業績への最良の入門書といえよう。ただ、以前の本にはあった、治療の実際や機能回復の理論について述べられていないのは残念である。

* ブックガイド。総合リハ、1, 1129, 1973.

（Penguin Books, 398 頁, 1973）（東大病院 上田 敏）

「The working brain」は、現在医学書院で翻訳進行中（編集室）

死ぬ瞬間の対話

E. キューブラー・ロス著 川口正吉訳

著者キューブラー・ロス女史（アメリカの精神科医）の前著「死ぬ瞬間」（川口正吉訳、読売新聞社）は名著と云う人が多い。この本において女史は、「死」を受容するにいたる末期患者の心理過程を 5 段階に図式化した。すなわち、(1) ショックと否認の段階、(2) 怒り、(3) 抑うつ、(4) 取引、(5) 受容、そして最後にデカセクト（これは段階とは云えないようだ）である。この段階は、「死」のみでなく、「身体障害」「老い」といった人生にとって最もショッキング、かつ不可逆的な事件に直面した人間における心理過程にもそのままあてはまる——という意味で、多くの読者の心をとらえたのにちがいない。我々リハビリテーション関係者の間でも、「障害の受容」過程を、この図式化に沿って理解しようとする者も多い。

前著が、いわば患者の心理的プロセスの natural history であったのに対し、続編とも云うべき本著は、「どうかかわるか」という援助の具体例を内容としてい

る。前著が世に出て以後 5 年間、著者は、医者、看護婦などの要望に応じて死にゆく患者の看護について 700 回もの講演を重ねたという。その中で交わされた問答のうち、しばしばなされる質問 395 問について答えたものが本書である。これを I 章の「臨死患者」から XIII 章の「個人的な質問」までに系統的に整理して掲載している。脳卒中、ジストロフィー、脊損、視力障害といった身体障害のこと、また「老い」のことなど我々の領域に關係の深い患者の例もあげられている。また作業療法士、理学療法士からの質問も 1 問ずつのせられている。全体を通じて感じられるのは、まことに素直で正直、感受性ゆたかな著者の姿である。悲しい時には共に泣き、感情移入を許容する。例えば「否認」段階にある患者を無理に次の段階にプッシュすることは真の「援助」ではないと著者はいう。「障害者」への援助を業とする PT・OT 諸氏にぜひ一読をすすめたい。（読売新聞社、253 頁、1975）

（都心障センター 寺山久美子）